



名古屋柳城短期大学

ちゃべるにゅーす

第25号 (クリスマス号)

2013年12月18日

「東方に見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた」

(マタイによる福音書 2章 9～10節)

◆神さまのくわだてに感謝

クリスマスはイエス・キリストの降誕の出来事です。その前後のことをふりかえってみましょう。学者たち(占星術・天文学)は東の国から幼子イエスを拝むためにはるばるエルサレムまでやって来ました。しかし、かれらのそうした行為はユダヤの国王、ヘロデを不安にさせました。イエスが自分の地位を脅かすのではと考えたからです。そこで祭司長(ユダヤ教の宗教的政治的指導者)や律法学者(ユダヤ教經典の解釈者)に尋ねました。「救い主はどこで生まれるのか」と。さらに東方から来た学者には、「星はいつ出たのか」と聞きました。

ヘロデ王はイエスを殺す以外に自分の王位を守れないと考え、ついにベツレヘムとその付近の二歳以下の男の子を皆殺しにしました。ヘロデ王は自分の王位を守るためにこんなに残虐なことしたのでした。嬉しいクリスマスの陰に、このような悲しい事件があったのです。いっぼう再び幼子を探しに出た学者たちの頭上には、東方で見たあの星が輝いていました。その星に導かれて、学者たちは幼子イエスに出会い、神さまのおおいなるくわだてに感謝し、喜びました。

◆クリスマスの意義

自分だけが頼りだ、自分しか信用できないという人には、ベツレヘムの星の輝きにあらわれた神の御わざを受けとめる余裕はありませんし、何も見えません。しかし、東方の学者たちは違いました。神さまを畏敬し、神さまの恵の深さ

を知りました。なぜイエスがこの世にお生まれになったかを悟ることができたのです。

このように、謙虚な心は神さまの示されるものをはっきり見ることができます。これは、いままで自分だけを頼りに生きてきたことからの決別です。主イエスを王として迎え、イエスに自分をゆだねることです。私たちはいつも、自分を支配するものは自分と考えていますから、自分のすべてをゆだねるといことは大変難しいことではあります。しかし、神さまは一人子イエスをこの世に遣わされました。罪に陥り、希望を失い、さまよいつづける私たちを救われるために、イエスをこの世に誕生させたのです。そして、イエスを救い主と信じて礼拝することがクリスマスの意義だと思います。

イエス・キリストの 降臨と神さまのおおいなる愛

学長 新海英行

◆ともに喜び、感謝し、祈ろう

クリスマスにはプレゼントが欲しいですが、実はイエスこそ、神さまが私たちに下さった最高のプレゼントにはほかならないと思います。イエス・キリストの降臨という出来事とおして神さまのおおいなる愛を受け入れ、喜びと感謝をもってクリスマスをお祝いしましょう。

最後に、みなさんと心をつにして祈りましょう。東日本大震災では多くの尊い命が失われました。たくさんの方々が被災され、未だに不安と悲しみの中におられます。事態の収束が一日も早からんことを。ひるがえって世界を見渡すと、戦争・民族紛争、失業・貧困、支配・差別、さらに災害などが数々の大惨事をもたらしています。クリスマスには、神さまの愛と恩寵を信じて、私たちが少しでも神さまの御旨にかなう時代を拓いていくことができますように、ともに祈りましょう。

東日本大震災復興支援ボランティア 2013

2011年3月11日に東北地方に甚大な被害を及ぼした東日本大震災から2年以上が過ぎました。年月の経過とともに、震災の出来事が私たちの意識や話題の中で薄くなってきているように思われます。私たちの意識の中での震災の「風化」こそ、今年で3年目を迎える本学の被災地支援ボランティア活動の今年度のテーマです。準備・企画にあたり、現地の方々や支援スタッフと連絡を重ねていく中で、「この震災を風化させたくない」という強い思いを感じました。この思いに少しでも応えられるように、被災者との心の「キャッチボール」を継続・発展させようと、柳城の学生ボランティアと教職員は準備を重ねてきました。

今年のボランティアは、A日程 8月16日～19日、B日程 9月1日～9月4日の2期間にわたって実施され、両日程とも学生8人、教員3人が参加しました。

名古屋から仙台までは新幹線、そして仙台からはレンタカーで、被災者支援の拠点となっている福島県相馬郡新地町の「被災者支援センターしんち」に移動しました。現地に到着して、まず私たちは新地町・山元町の「被災地巡礼」に出ました。これは、支援センタースタッフの松本さん、高木さん、森さんの案内のもと、被災した各地域を数か所巡礼するものです。

その中でも特に私たちの記憶に残り、強い印象を受けたのは、柳城が継続的に関わりをもたせていただいている「ふじ幼稚園」の被害状況をお聞きしたことでした。14時46分発生の地震後、子どもたちの降園時に園を津波が襲いました。被害に遭った旧園舎はすでに使用されていないものの、そのまま残されており、園バス用の駐車場の壁には、津波の高さを示す大人の背丈以上の泥水の跡が生々しく残されていました。参加者一同、静かに祈りました。

2日目には、柳城の学生による交流プログラ

ムを行い、仮設住宅を訪問しました。そこで生活する方々は笑顔で私たちを迎えてくださったのですが、交流の中で、その胸に秘められた痛切な思いを吐露され、過ぎ去ろうとしない震災と津波の現実を知りました。仮設住宅の集会所や支援センターでは、夏休みの宿題やろう会、ミニコンサート、茶話会、裂き織り作業参加などを行い、多くの子どものや住民の皆さんとのふれあいの時間をもちました。何人もの子どもたちから「お姉さんたち、明日も来るの？ここに泊まってもいいんだよ」と話しかけられてきた時には、言葉が出ませんでした。

最終日に訪れた新園舎のふじ幼稚園では、先生が、「被災地の子どもたちはとても我慢づよいけれど、それは、あの子たちが我慢づよくなくなるとはいけないような現実があるから」とおっしゃっていました。

直接、被災地に足を運ぶことはできなくても、“名古屋にいながら私たちにできる被災地支援”をコンセプトに、今年は現地の「被災者支援センターしんち」（ここでは週1回、地域の方々が集まって茶話会が開かれている）に柳城生による手作りケーキを送るという活動を行っています。また、被災地から頂いたひまわりの種を蒔いて花を咲かせ、その成長や開花の様子を現地に報告するという活動も行ってきました。

この報告が、改めて被災地を覚えつつ祈る機会になることを願っています。



創立115周年記念礼拝

11月1日（金）に創立115周年記念礼拝が行われました。本年は、短大としても設置から60周年という節目の年になっています。創立記念礼拝とその関連行事を写真とともに振り返ってみたいと思います。

第1部では、田中誠チャプレンの司式の下、創立記念礼拝を執り行いました。式典のなかでは、渋澤一郎理事長、新海英行学長の式辞が述べられ、永年勤続者（尾上明子 特任教授：30年、中野早苗 附属柳城幼稚園園長：10年、中村雅 総務課長：10年）への表彰も行われました。

第1部の終了後には、2年次前期の成績上位者である奨励奨学生の表彰式が行われ、式内では代表として竹内綾菜さん（成績1位）に表彰状および奨学金が授与されました。



創立記念礼拝（第1部）



奨励奨学生表彰式

第2部では、「マーガレット・ヤング先生の生涯とその働き」と題するスライドショーが、尾上特任教授と保育専攻1年生によって行われました。これは尾上先生が長く調査されてこら

れた柳城の黎明期について当時の写真やイラストを交えた解説となっており、スライドの中ではヤング先生と柳城学院の歴史（生まれ育ったカナダの故郷エルマーの当時の写真、ヤング先生の生い立ち、なぜヤング先生は来日されようとしたのか、幼稚園の設立の経緯、柳城と聖使女学院との関係、なぜ柳城幼稚園が現在の地にあるのか、など）がまとめられており、創立者であるヤング先生の当時の日本の人々への熱い想いが伝わってきました。

このスライドの内容をまとめ、冊子としたものはクリスマス礼拝時にプレゼントとして全学生に配布されました。



尾上先生と専攻科学生によるスライドショー
「マーガレット・ヤング先生の生涯とその働き」

墓地礼拝

午後からは、名古屋市八事霊園にある日本聖公会中部教区の共同墓地まで赴いて、ヤング先生をはじめとする柳城学院関係者の墓地での礼拝と献花を行いました。



ヤング先生のお墓の前で

後期の礼拝から

阪下 起子（豊田幼稚園教諭）10月16日（水）

附属豊田幼稚園に勤めて3年目、今は年少ちゅうりっぷ組24名の担任をしています。夏にとても心に残る出来事がありました。

遊ぶ事が大好きなAちゃんは、自由遊びの後、片付けをして部屋に戻るという切り替えができずに、満3歳児も組の部屋へ行き、遊び続けていました。何度か呼びに行ったのですが、遊びに集中していて戻ってくる気配がありません。やがて給食の時間になり、クラスの子どもたちがAちゃんのことを気にし始めました。「Aちゃんはー？」「どこにいるの？」と子どもたちの声があがったので、子どもたちに話をしました。3歳の子にどれだけ伝わるのだろうかと思いつつ、「Aちゃんは今も組のお部屋で遊んでいるの。もうすぐ給食になっちゃうけど戻ってこれなかったら今日は一緒に給食食べれるかわからないね」と言うと、子どもたちから「Aちゃんはちゅうりっぷ組だよ！」「Aちゃんと給食食べたい！」「みんなで呼びに行こうよ！」「行こう！」私が止める間もなく、子どもたちが園舎の端にあるも組の部屋まで走りだしました。そしてみんなでAちゃんを囲み、「一緒にちゅうりっぷ組に行こう？」「一緒に給食食べようよ～！」と声をかけ始めたのです。

入園当初は泣いている子が半数を超えていたちゅうりっぷ組の子どもたちが、ほんの数ヶ月で友だちのことを気にかけるようになったのです。その姿に胸が熱くなりました。そして幼児期の発達、成長がこんなにも大きなものなのだと実感し、その時期に関わることが出来ることに嬉しさと大きな責任感を感じました。

私にとって、子どもたちと過ごす毎日が、新しい発見、喜び、感動です。伝えたいことが伝わらないときも、子どもたちが伝えたいことを汲み取ることができずに悩むときもあります。そんなときは時間がかかっても、子どもたちと真剣に向き合うようにしています。一日の終わりには必ずその日を振り返り、先生方と反省や報告を行います。



「今日はなんだか落ち着かなかったな」

「あの子が友だちの遊びに入れてって言ったんだよ！」

「今日牛乳が初めて飲めたよ！」

大きなことも、些細なことも、保育が終わると自然と子どもたちの話が始まります。この時間を私は大切にしています。保育は先生方のチームワークが重要です。子どもたちのために、という同じ思いを持った先生方の存在は私にとってとても大きなもので、子どもたちの成長と一緒に喜んだり、何時間も悩んで話し合うこともあります。先生方との時間も私の保育者生活には欠かせない大切な時間になっています。

保育者という仕事は、楽しいことばかりではありません。それでも私が、今が1番幸せだと胸を張って言えるのは、大好きな可愛い子どもたちがそばにいるからです。新しいことを学んでいるのではなく、私にもみなさんにもあった幼児期を日々学ぶことは、なんだか不思議でとても面白いです。どんな先生でも、子どもたちは必ず大好きになります。そんな子どもたちの成長のお手伝いをこれからも全力でしていきたいと思っています。

私には大切にしている言葉があります。「あなたに出会えてよかった」という言葉です。子どもたち、保護者の方、職場の先生たち、悩みを聞いてくれる友人、そして一番近くでいつも支えてくれる家族、出会ったすべての人に、あなたに出会えて良かったという感謝の気持ちを持ち、これからも歩いていけたらと思います。そして、保育者を目指すみなさんのことを心から応援しています。

後期の礼拝から

水落 洋志（本学教員）11月20日（水）

礼拝にて講話する依頼を受け、学生に何を話そうか悩んでいる時、ふと自分の幼少期の写真が目に入りました。そこから、自宅にあるアルバムを引っぱりだし、自分がどんな子どもだったかを見ていると写真の裏に「昭和〇〇年〇月〇日、洋志が忍者になり、走り回っている様子、リアリティーを求めているなあ」など1つ1つ母親からのメッセージが残っていました。そういった自分の幼少期を振り返る中で色々な体験や経験をしていることを思い出し、「私の人格はこういった体験や経験から培われたのか」ということを改めて感じました。そこで、これから初めて実習に出る1年生、最後の実習・就職や進学を控えている2年生、より専門的知識と実践力が問われる専攻科学生に対し、「幼少期の体験や経験が人格を形成することや周囲の環境

（人的・物的環境）の重要性」について自分の体験や経験を振り返り話すことを決めました。

私の人格は、どんな人格なのでしょう？自分で考えるのも1つですが身近にいる人に聞いた方が妥当だと思い、嫁に聞いてみました。そうすると、「熱い、思ったことはやらないと気がすまない、集中すると人の話は耳に入らない、人のことを優先してやる、頑固」だそうです。私自身、そんなに頑固と思ったことはないのですが、聞いたままを載せることとします。

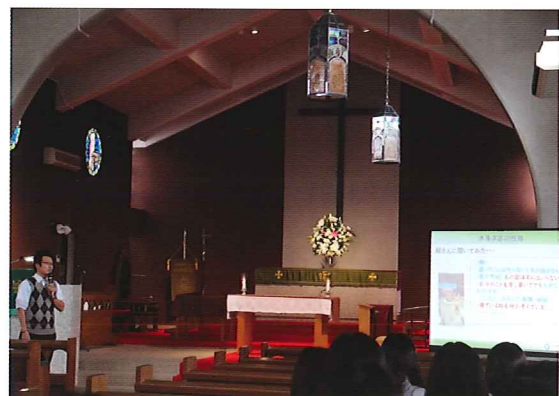
さて、こんな人格である私がどんな幼少期の体験や経験をしてきたかというところと下記の通りです。



1. 空を飛びたかった私が円形ブランコに乗りその勢いで空を飛んだ結果、病院へ搬送された。
2. スケートが好きだった私は朝早起きして自宅の前に水をまきスケートリンクを作った結果、近隣の方々が車でのお勤をできなくなってしまった。
3. 洗濯機に服を着たまま入りまわっていた。
4. サンタクローズになれると思い、屋根からソリで飛んでみた。
5. 真冬に外で飼っていた犬を家に入れるかわりに自分が犬小屋で寝てみる。etc

振り返ってみると人とは異なる体験や経験をしてきた私ですが、やりたいと思った時は、頭よりも身体が動き、やるといったらやっていたのでしょ。また、客観的にみると大丈夫？ということも実行させてくれた周囲の人々がいてくれたおかげでもあると思います。このような体験や経験を通じてこれから実習、就職などを控えている学生が保育とは答えが1つではなく、子どもが主体性や自主性をもって行動したいときに見守る役割であり、その子どもの人格を形成するパズルのピースになりえる素敵な仕事であると感じてくれたらと思います。

最後に、保育者って本当に素晴らしい仕事です。発達段階で一番重要な時期に関わる保育者になろうとしている皆さんがプライドをもって現場にでることを願います。



名古屋聖マタイ教会 クリスマス・イブ礼拝のご案内

○12月24日 午後7時～

○12月25日

降誕日第1 聖餐式 (深夜ミサ) 午前零時

第2 聖餐式 午前7時

第3 聖餐式 午前10時半



ふだん柳城のチャペルとして親しんでいる名古屋聖マタイ教会のクリスマス・イブ礼拝をご案内いたします。キャンドルに灯された光の中で行う聖公会の伝統的な礼拝です。

もろびとこぞりて

迎えまつれ 久しく待ちにし

主はきませり 主はきませり

主は 主は きませり



今年のクリスマス献金先

- ❖ 東日本大震災支援
 (「被災者支援センターしんち」を通して)
- ❖ フィリピン聖公会 (台風災害支援のため)
- ❖ アジア保健研修財団
- ❖ 笹島キリスト教連絡会
- ❖ 岐阜アソシア
- ❖ 国際子ども学校
- ❖ キリスト教保育連盟
- ❖ 聖公会保育連盟
- ❖ ひだまりの里
- ❖ 中部教区センター
- ❖ 博愛社
- ❖ 聖ヨハネ学園
- ❖ エリザベス・サンダース・ホーム



2013年12月18日発行 第25号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所 株式会社 マルワ

編集後記

絵本『ひとまねこざるときいろいろぼうし』のことを調べていて、面白い発見がありました。作者のH.A.レイは1898年生まれ。マーガレット・ヤング女史が保姆養成所を創設して、今の柳城学院の礎を築いたのと同じ年です。レイは、ドイツに生まれながら、フランスのパリで結婚生活をはじめ、ドイツ軍のパリ侵攻を避けてアメリカへ渡るといふ数奇な運命を生き抜きました。激動の時代をくぐり抜けて私たちに伝えられたもの、託されたものの重みを感じます。今年は学院創設115周年であるとともに、短期大学60周年の年でもあります。ヤング先生のように、またレイのように、子どもたちにたくさんの恵みを伝えていければと願っています。(村)